

桂離宮を巡る (8) 訪ねた人たち

藤原 道夫

ここを訪ねた人たちの記録は、参観しながら離宮での楽しみ方を想像するうえで、とても参考になる。

離宮が完成した寛永元年（1624）に行われたお披露目の会については、すでに紹介した。招待された人たちはみな創意に満ちた回遊式庭園に目を見はったようだ。

寛文3年（1663）三代目当主穩仁（やすひと）親王の時代に、ご尊父後水尾上皇の御幸があった。それは大変な出来事で、御幸門や新御殿などが新設された。その時の上皇の遊興ぶりを金閣寺長老鳳林承章が日記に残している。概略を以下に。

一行は桂川に舟を漕ぎ出そうとしたが風が強いために断念し、庭園内の池での舟遊びとなった。院の舟に承章ら7人が同乗する。菓子が配られた後に承章が漢詩をつくって院にお目にかける。その一節に「白桜爛漫雪乾坤」とある。池の水面に散り敷く花びらを分けて舟は古書院正面の舟着きに。書院にあがると料理が用意されていた。茶が二度点てられ、今度は文芸を楽しむ。いつしか夕暮れがしのび寄り、燭台に火が灯された。花びらが光って庭を飛び交う・・・

江戸時代末期には見学を希望する人たちが多かったようだ。見学を許された公家が『拝見記』を残している。一行36名は皐月のある朝6時に桂川東岸に集まり、茶屋で全員服装をただす。兩岸には高張提灯が建っていた。舟で西岸に渡ってから羽織袴を着こむ。ここから帯刀の案内人が先立ってすすむ。8時頃に北の門（黒御門か、現在の参観も通る）から中に入り、用意された部屋（臣下の控所か）にあがる。お茶を喫してから書院と御殿の中を案内された。一通り見学した後に、庭園と茶室を丁寧に見てまわった。御幸門から始まって・・・とあるので、現在の参観コースと同じようにまわったのであろう。

見物して元の部屋に戻ると、料理と酒が用意されていた。見学を終えたのが午後3時、朝8時から7時間におよんでいる。一行は桂川西岸に戻ると円座を組み、今度は持参した弁当をひろげて酒を酌み交わしながら、今しがた見学した離宮のすばらしさについて語りあった。

この離宮に日本人の美意識が結晶しているように思う。現在の1時間の参観では、ほんのうわべしか分からないだろう。しっかり見て遊び方も理解したいがために、季節と時間を変え長年参観してきた。昨春で約30回に及び、ようやく思いが叶えられた気分になっている。